

日本語および英語における対称詞の機能:ポライトネスとの関連性

油 井 恵

1. はじめに

母語話者が英語で発話する際、話者はしばしば相手の名前を呼びかけるが、母語話者による日本語の発話の際に相手の名前を呼びかけることは多くない。

(1a) Paul: Hi, Cathy! I've never thought I'd see you here.

Cathy: Hi, Paul. I was thinking the same thing about you.

(1b) ポール: やあ, キャシー。ここで会うとは思わなかったよ。

キャシー: あら, ポール。私もそうよ。 (山岸 1995: 159)

このような日本語訳は文法的であっても不自然に感じられる。日本語ではこのように相手の名前を付け加えることはあまりなく、山岸(1995)は日本語にはそのような言語習慣はないとしている。

(2a) Joey: No, it's not weird, it's a miracle!

Rachel: It's not a miracle, Joey! I'm sure there's some explanation.

Joey: Oh there is! If you want something enough and your heart is pure,
wondrous things can happen!

Rachel: Joey, I really don't...

Joey: (interrupting her) Can you tell me how this happened?

(2b) ジョーイ: 変じゃない, 奇跡だ!

レイチェル: 奇跡じゃないよ! きつと何かあるよ。

ジョーイ: あるさ! 一生懸命願って心が純粹なら, 驚くようなこともある!

レイチェル: 本当に違うと...

ジョーイ: (遮る) じゃあ, 説明できる?

(Kimura 2002 一部改変; 以下Aと称す¹⁾)

この例では日本語訳に相手の名前を全く付加していないが、全く自然に感じられる。それでは次の例はどうだろう。

- (3a) Rachel: Well, it's a long story, but umm I broke Joey's chair...
Chandler: Whoa-whoa-whoa! You broke Joey's chair?
(3b) レイチェル: 話長いけど, ジョーイの椅子壊しちゃって…
チャンドラー: ま, ま, 待って! レイチェルが壊したの? (A)

英語の例では"you"が使われているところが, 日本語訳では「レイチェル」と相手の名前になっている。「あなた」や「君」とはなっていないけれども, このほうがずっと自然である。

本稿では, これらのような発話における呼びかけや人称の問題を含む対称詞の機能, そしてポライトネスを表現する際のその役割について論じる。

2. 日本語における対称詞

2.1 対称詞の種類

対称詞とは, 鈴木(1973)によると「話の相手に言及することばの総称」(146)である。日本語における対称詞について例を挙げて確認したい。

- (4) 君は, この曲が好き?
(5) 先輩だったらきっと弾けますよ。
(6) それで涼子ちゃんは, どうしたいの?
(7) ねえ, 涼子ちゃん, こういうのはどう? (全て北川 2004; 以下Bと称す)

日本語には, 人称を表す語が多く存在する。聞き手を表す語としては例えば「あなた, 君, お前, 貴様」などがある。(4)はその例である。これは, 聞き手を直接指し, その場の状況によって指す対象が変化するので直示的である。直示的, つまりダイクティックであることにおいては, 代名詞的な振る舞いを見せるといえる。

また, こうした語は話し手と相手との関係により選択されるため, 境遇性があるといえる。話し手が自称する語と聞き手を称する語とは互いに対を成しており, 互いの関係の変化に応じて対称詞も変化する。さまざまなヴァリエーションがあることで分かるように, 日本語では一人称や二人称を表す名詞は文法的なカテゴリーとして閉じた形で確立していない。このような状況だと, これらの語は代名詞として文法化されているとは言いがたい。そのため, ここではこれらの語を人称名詞として扱う(田窪 1997, 鈴木 1973 参照)。

(5)は定記述が対称詞として使われている例である。「お父さん」, 「お母さん」などの親族名称, 「先生」, 「先輩」などの上下関係を表す語, 「社長」, 「課長」などの職階名称, 「お花屋さん」, 「お医者さん」などの職業名がこれに当たる。話し手にとっての「お父さん」や「先輩」が対称詞として使用されている場合, それが指す対象は確定しており, あたかも固有名詞のような働きをするのである(田窪 1997参照)。

最後に、固有名詞も対称詞として用いられる。(6)は話し手でも聞き手でもない第三者についての発話の場合も有り得るが、涼子を聞き手とした発話の場合でもまったく問題がない。もちろん、そこに「あなた」のような人称名詞が省略されていたりしているわけでもなく、(5)や(6)は対称詞という概念を導入する必要性のゆえんである。以上をまとめると次のようになる。

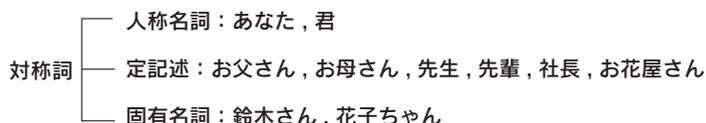


図1 対称詞の種類

2.2 対称詞の用法

また、対称詞には二つの用法がある。

まず、呼格的用法(vocative use)と呼ばれる、「相手の注意を引きたいときや、相手に感情的に訴えたい場合」(鈴木 1973: 146)に使用されるものである。これは(7)の場合にあたる。

もうひとつは代名詞的用法(pronominal use)と呼ばれているものである。「ある文の主語または目的語として用いられたことだが、内容的には相手をさしている場合」(鈴木 1973: 147)をいう²⁾。これは、「インド・ヨーロッパ語では、相手に言及する内容を持つ文の主語または目的語には、通例二人称代名詞が来ることからこのように名づけ」(鈴木 1973: 147)られた。日本語の場合、実際には先述のように人称名詞でさえ文法的に代名詞ではないので適切な用法名と言えないかもしれないが、例のうち(4)から(6)がその場合にあたる。定記述や固有名詞はまして代名詞ではないわけだが、主語または目的語として相手を指し、文の構成上、またその指す対象がyouと等価である点が特徴的とされているのである。

2.3 人称名詞の対称詞としての性質

人称名詞の対称詞としての使用は語用論的に制限があり、目上の人を使用することはポライトネスの観点からできないと言える(鈴木 1973, 田窪 1997参照)。

(8)(先生に対して)あなたはこの曲が好きですか。

(8)のような文は文法的にも意味的にも問題ないが、ポライトネスの観点から問題があり、実際の発話としては不適である。この点に関しては、後でもう少し詳しく論ずる。

3. 英語における対称詞

英語の場合、文法的に人称代名詞が確立しており、文法的な文を作るためには基本的に主語として人称代名詞を使わなくてはならない。したがって、英語における対称詞では代名詞的用法では定記述や固有名詞は使用されず³⁾、呼格的用法で用いられる。

(9a) There, mother, there's your luggage.

(9b) *There, mother, there's mother's luggage.

(9c) There's my mother's luggage. (鈴木 1982: 40; 一部改変)

(10a) Joey, you broke my chair!

(10b) *Joey, Joey broke my chair! (A)

(11) 涼子ちゃん…、涼子ちゃん、瀬名とうまくいったの? (B)

(9a)は自分の母親に対する発話だが、(9c)は自分の母親ではない聞き手に対する発話である。また、(9a)と(9b)が同じ聞き手に同じ意味で使われることはないし、そもそも(9b)は文法的ではない。(10a)はJoeyが聞き手の場合の発話だが、(10b)は(10a)と同義にはならないし、呼びかけた相手と文の主語が同じJoeyである場合、非文である。それと比べると、日本語の例の(11)は呼格的用法と代名詞的用法の同じ対称詞が重複して使用されているが、このような冗長な形のほうが場合によってはより自然であることも多い。これは英語には基本的には見られない用法である(田窪 1997参照)。

また、英語の場合、聞き手が目上であるかどうかにかかわらず、人称代名詞はyouを使用する。聞き手に言及する文は全てyouを使用するということである。

4. 名前の付加あるいは呼格⁴⁾の機能

4.1 呼格の機能の種類

それでは、そもそも呼格の機能とはどのようなものであろうか。

Biber et al. (1999:1112) は呼格の機能を3種類挙げている。

(12)a. getting someone's attention

b. identifying someone as an addressee

c. maintaining and reinforcing social relationship

まず、呼格による呼びかけは、挨拶など対称詞を使用しない発話でも使用される。

(13a)(=1a) Paul: Hi, Cathy! I've never thought I'd see you here.

Cathy: Hi, Paul. I was thinking the same thing about you.

(13b)(=1b) ポール: やあ、キャシー。ここで会うとは思わなかったよ。

キャシー: あら、ポール。私もそうよ。 (山岸 1995: 159)

また、挨拶ではない発話の中でも呼びかけは行われる。

(14a)Michelle: Steph, what's a vowel?

Steph: Anything that's not a consonant.

Michelle: DJ, what's a consonant?

Steph: Anything that's not a vowel.

(14b)ミシェル: ステフお姉ちゃん, 母音ってなあに?

ステフ: 子音じゃない音のこと。

ミシェル: D J お姉ちゃん, 子音ってなあに?

D J :母音じゃない音のこと。

(小林 2001 一部改変;以下Cと称す)

(15a)DJ: Oh, my gosh! Kimmy, Roborato's car's on the roof.

Kimmy: I know. I can't get over it either.

DJ: With the top down! Kimmy, the interior is gonna be destroyed!

Kimmy: This prank is turning out to be great!

DJ: Kimmy, the idea of this prank is not to ruin his car, just to ruin his day!

We've got to get back there and put the top off. Wait, we can't. It's an automatic top and we'd need the keys! We are dead.

(15b)DJ: ああどうしよう。キミー, 先生の車, 屋上なのよ。

キミー: ほんと。あたしでも立ち直れない。

DJ: ルーフ下げたままなのよ。雨降ったら中がめちゃめちゃよ。

キミー: ますます最高!

DJ: だめよ。このイタズラは車を壊すのが目的じゃないんだから。すぐ戻って

ルーフをかぶせなきゃ。待って, だめだ。あれオートマだからキーがなきゃ動かないよ。どうしよう。 (C)

(16)桃ちゃん…寝た? (B)

(14), (16)の例は(12a)にあたるもので, これは日本語・英語ともによく見られる例である。(14)は(12b)の働きも同時に行っている。これも日本語でも呼格に期待する働きである。

また, (13)の例は(12c)の機能を果たしている。相手に対して, 自分は相手を知っている, 認めている, と伝えているのである。(15)の例はどれも広く取れば(12c)の機能と言えるであろうが, 自分の不安や感情を共有してもらいたいためのものである。この事態が何を意味するのか, 相手にも気がついて欲しいのである。(13)の日本語訳が不自然であることや, (15)の日本語訳では全ての呼格を訳していなかったりその心情に訳し変え

ているのを見ると、(12c)の機能を持った名前の付加は日本語では英語に比べると少ないということがわかる。日本語の場合、(13b)の例で分かるように、相手の名前を付加することがわざとらしく聞こえたり、耳障りだったり、あるいは相手に対して過度に馴れ馴れしいとか親しげに聞こえてしまいがちのため、そのような名前の付加はあまり行われないのである。

(17)Rhineheart: You have a problem with authority, Mr. Anderson. You believe that you are special, that somehow the rules do not apply to you.
Obviously, you are mistaken. ...The time has come to make a choice, Mr. Anderson. Either you choose to be at your desk on time from this day forth, or you choose to find yourself another job. Do I make myself clear?

Neo: Yes, Mr. Rhineheart. Perfectly clear.

(18)Agent Smith: And tell me, Mr. Anderson, what good is a phone call if you are unable to speak? ...You are going to help us, Mr. Anderson, whether you want to or not.

(どちらもWachowski and Wachowski 1998;以下Dと称す)

それでは(17)、(18)はどうであろうか。

この二つは(12c)の機能を果たしていると言えば、少し説明が足りない感がある。これはどちらも話し手の社会生活上、あるいは当該対話での立場を聞き手の名前を呼ぶことによって示している。聞き手の名前はそれぞれタイトル付きの苗字で呼ばれているが、それによって互いの距離と共感の無さを示している。

(17)は上司と部下の対話だが、上司はその立場の優位性を背景に部下の立場の劣位性を皮肉を交えて伝えているし、(18)は初対面にもかかわらず相手の名を連呼することで、聞き手のことはよく知っている、という不気味さ、優位性、あるいは脅迫じみた雰囲気をかもし出している。これは話し手が、聞き手が気付いていない、あるいは聞き手に思い出してもらいたい、話し手と聞き手の間にある社会関係を新たに提示する機能を果たしていると言える。

また、(18)のような発話のたびに相手の名前を呼ぶような場合、相手の名前を個人の名前(例えばNeo)⁵⁾や、日本語であれば「…ちゃん」などと呼べば、馴れ馴れしさや押し付けがましさを伝えることができる。この場合も話し手が、聞き手が気付いていない、あるいは気付きたくない、または聞き手に思い出してもらいたい、話し手と聞き手の間にある社会関係を新たに提示する機能を果たしていると言える。

他にも、例えば今までタイトル付きの苗字で呼んでいたのが急に個人の名前で呼べば、それは相手との人間関係の変化や、関係を今までと違う形で捉え直したことを示している。

このように見ていくと, Biber et al. (1999) が提示する呼格の機能のうち, 「c. 社会関係を維持し強化すること」については, それだけでは説明が足りない部分があるといえる。あえて広く捉えるなら, 二者間の社会関係の態様の提示ということになる。

4.2 呼格使用の動機

4.2.1 ポジティブ・ポライトネス

水谷(1985)によると, 文の中に受信者の名前を入れることは相手への愛情や尊重を表現していることとなる。Biber et al. (1999) の分類の中でも, (12c)の用法の例には話し手の聞き手に対する共感や相手を認めているさまを表しているものが多い。

ポライトネスとは, 「人間関係を維持するための社会的言語行動」(生田 1997: 66)である。実際の言語使用においては互いの感情を害さないで, あるいは心地よくし, 人間関係をスムーズに進めることができるような対話をするのが重要と考えられるのである(Brown and Levinson 1987 参照)。

Yui (2002) で指摘したように, 対称詞の呼格的用法のなかでも(12c)は, 相手の名前を呼ぶことで親しみを表し, それにより相手を心地よくするポジティブ・ポライトネスの機能を担っていると考えられる。そして, それは英語の場合に顕著であるが, 日本語にもその例がないわけではない。

(19)(=7)ねえ, 涼子ちゃん, こういうのはどう?

(B)

この発話は, 話し手と聞き手の二人だけの対話で行われている。(12a)の「相手の注意を引くこと」は「ねえ」で果たされているし, (12b)の「誰に呼びかけているか特定する」必要もない。「涼子ちゃん」は親しみの表れなのである。ただ, 日本語の場合, 呼格が文の後ろに位置することは少ない。英語の場合, 後ろに位置することも多く, その頻度が大きな違いと言える。

また, 日本語では対称詞の場合に限らず, 社会背景や敬語というシステムが文法的に確立されていることもあり, 対人関係の調節にはネガティブ・ポライトネスを使用することが多いため, ポジティブ・ポライトネスが使われることが少ない, あるいはそれがポライトネスの発現だと認識されにくいということがある。対称詞の呼格的用法についても, 同様の状況が伺えると思われる⁶⁾。

4.2.2 人称代名詞および人称名詞の直示性とポライトネス

ここで再度, 代名詞的用法における人称代名詞および人称名詞の問題について取り上げたい。

英語における人称代名詞および日本語における人称名詞は直示的な語であるので, 対話の役割だけを指定する語である。これは, それぞれの社会的な状況を考慮に入れることをせず, 話し手が相手に「聞き手」という役割を与える形になるので, その点で水平な, 対等な関係を推定するということにつながる。

しかし、社会生活上、実際の言語使用場面においては、対話を行っている人間どうしの関係における発話の適切性が、その対話の成功に重要な役割を果たすと考えられる。そこでポライトネスを適切に用いる必要性が生じる。

そのための方略はさまざまあるが、その中のひとつに相手を尊重していることを示すために、自分の発話を相手に押し付けないよう、直接的な言い回しを避けるということが挙げられる(Brown and Levinson 1987 参照)。

翻って、人称代名詞あるいは人称名詞を使うということは、相手に対する敬意を表すために必要な、直示性の忌避が行われなければならないということを意味する(田窪 1997参照)。日本語で目上に向かって「あなた」が使えないというのは、「あなた」が聞き手をあまりに直截に指示することによるものと考えられる。

一方、定記述や固有名詞の場合、直示性は問題にならない。定記述や固有名詞は指示対象が決まっているので、その状況に応じて変化するということはない。話し手が聞き手に付与する役割は可能な限り少なくなり、相手を尊重する態度を示すことができる。その場合、特に固有名詞を使うことはポジティブ・ポライトネスであるとも考えられる。

それでは、文法的に人称代名詞を使わざるを得ない英語の場合はどうなのであろうか。

(20)Trinity: Right now, all I can tell you, is that you are in danger. I brought you here to warn you.

Neo: Of what?

Trinity: They're watching you, Neo.

Neo: Who is?

Trinity: Please. Just listen. I know why you're here, Neo. I know what you've been doing. I know why you hardly sleep, why you live alone and why, night after night, you sit at your computer. You're looking for him.

(D)

英語でも相手のネガティブ・フェイスを尊重することは重要であり、そのために直示的な言い回しを避けようとする。ただ、英語の場合、前述したとおり、文法的に文を作成するには人称代名詞を使わざるを得ない。その直示性を緩和するひとつの方策として、相手の名前を呼格で呼ぶと考えられる。

直示性の緩和には、Biber et al. (1999) の分類の中で最後に挙げられている、社会関係の維持・強化という機能が関与していると考えられる。神谷(2002)は、存在を意識した状態での名前の付加を「弱いひきつけ」と呼び、日本語訳におけるその有標性を含めてその存在を指摘しているが、これは英語における人称代名詞の直示性の緩和という役割を担っているのである。

こうして見ると、呼格によるポライトネスはポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスが同時に実現されるような、単純でない構造を持っていることが分かる。

日本語における直示性に対する緩和については、固有名詞をyouと等価として使う代名詞的用法として発現するか、直示性の緩和策としては究極のものとも言うべき主語の

省略により対応するため、呼格のまま直訳した日本語は不自然なものと映ることが多いのである。

5. 広い意味での対話相手に対する人称代名詞の使用

最後に、話し手が直接話をしていなくとも、聞き手、あるいは潜在的な聞き手として対話の場にいる人についての言及する際の人称代名詞についても触れておきたい。

英語では、話し手が一人称代名詞、聞き手が二人称代名詞、そしてそれ以外は三人称代名詞を使用するわけだが、以下のような例がある。

(21)10年程前、あるイギリス人の家に泊めてもらったことがある。その家に好奇心旺盛な5歳の少女がいた。遠い東洋の国からやってきた異国人の客を前に、少女は私のことを盛んに母親に話していた。私のことを指して "She is..." を連発していたその少女は、母親から「Sheじゃなくて、○○○(註:私の名前)と言いなさい」と注意されていた。その時、本人を目の前にして、三人称の代名詞を使うのは失礼にあたるということを初めて学んだ。

(nofumi 2005)

この三人称の忌避も、人称代名詞の直示性を嫌うことによるものと考えられる。

人称代名詞は話し手が把握する状況における役割のみを指定する語であり、三人称は話し手や聞き手でない、それ以外という役割を指す語である。誰かについて言及する際にその三人称を使用するということは、話し手がその人間にそうした役割を与えていることを意味し、話し手が自分を含めた「場」からその人間を排除していることを表している。

直接対話していなくとも、対話の場にいる人間は話し手や聞き手になる可能性があり、ましてそれが知っている人であれば、その人を対話の場から排除することはポライトネスに反する言語行動なのである。

英語の場合ほど明らかではないかもしれないが、日本語の例に筆者が覚えているこのようなものがある。

テレビで放映された歌番組で、デビュー間もない新人のアイドルデュオの一人が、共演した大物歌手と一緒にステージに並んで立ったまま、司会者からインタビューを受けていた。司会者からその歌手について印象を訊かれたアイドルは、いきなり「彼は・・・」と答え始めた。すると、隣でその歌手は苦笑いし、司会者はあわてて笑ってその場をつくろい、その発言を遮ろうとした。アイドルはその笑いがなぜ起こったのかを理解せず、再び「彼は・・・」と言い始めた。

同席している、しかも目上の人間に対して、「彼」という三人称を、突き放すように、あるいは客観的に論評するかのようになり、よりによってその場で一番目下であろう人間が使ったことに対する驚きと慌てた様子がそこには見て取れた。

日本語の場合、その直示性から、人称名詞は目上の人には使えないというのは前述したとおりだが、対話の場に同席している人間に関しても、三人称を使うのはポライトネスに反するという感覚はやはりあるように思われる。

それでは、対話の場に物理的にいない人間についてなら、いつでも三人称で言及できるのであろうか。

(22) "And doesn't she teach too?" he asked.

"Don't call her 'she'," I said.

"Doesn't Jennifer teach?" he asked politely. (鈴木 1982: 36)

この場合、Jenniferは実際の対話の場面に同席していない。その意味では三人称を使用することで単なる客体として対話の場から排除してもよいように思われるが、Jenniferは「僕」Oliverの妻であり、対話の相手であるOliverの父にとっても身内に当たる。たとえ物理的に同席していなくとも、三人称を使うのはポライトネスに反するのである。

これは、日本語の敬語と人称の関係にも通ずるものがあるように思われる。通常は話し手と聞き手以外は三人称で言及するのであるが、敬語においては話し手の身内は三人称でなく一人称として扱い、敬語は使用しない。また、聞き手の身内については、敬語の使用においては通常の三人称として扱うのではなく、聞き手と同等に二人称扱いをするのである(庵 2001参照)。日本語のみならず、英語の場合も人称は待遇表現やポライトネスに大きく関わると言える(Brown and Gilman 1960参照)。

6. おわりに

以上、本稿では日本語および英語における対称詞について、名前の呼びかけと代名詞的な振る舞いという点からポライトネスとの関わりを論じた。またそれに派生する問題としての人称についても考察した。

注

1) 用例は主に日米のテレビドラマや映画のシナリオから採集したが、一部、比較対照するための作例がある。原則的に引用した文献やウェブサイトにあるとおりにしているが、部分的に抜粋する上で理解しやすいよう、句読点を加えたり、訳を改変していることがある。その際、原文(例えば英語のシナリオであれば英語)の語等、文自体はそのまま使用している。用例の出典は初出の際に示すが、それ以降は用例として用いる順にその出典作品にアルファベットを当て、以下のように示す。

A: "Friends"

B: 『ロングバケーション』

C: "Full House"

D: "The Matrix"

2) 発話によっては、主語や目的語であることを示す助詞が省略されている場合もあり、その場合呼格的用法と形式上同じに見える場合もあるが、その文の中で果たしている機能によって代名詞的用法かどうか判別する。

3) 定記述の場合、自称詞であれば、例えば母親が自分の子どもに向かって "Okay, honey. Mommy will come to you right now." など親族名称を代名詞的用法で使用する

場合がある。

4) 呼格と呼んでいるが、英語の場合、実際には格としての特別な形態は通常見られない。日本語の場合、「～よ」と呼びかけであることを明示することもあるが、実際の発話でそのような例は殆ど見られない。したがって、名前の付加に過ぎないとも言えるが、呼格的用法という名称でその形態を指していることもあり、本稿では「呼格」という用語も使用する。

5) first nameや下の名前といった呼び方は、その名前の文化によって名前のどの部分を指すのか異なり得る。first nameは一般的に姓に対しての名、つまりgiven nameを意味するとされているが、それは英語(文化)の場合そうなのであって、字義通り解せば「一番目の名前」であり、例えば、英語ではJohn Smithのfirst nameは"John"だが、日本語の田中一郎のfirst nameは「田中」と考えることもできる。また、下の名前というのは縦書きにした際に下に来る部分ということになり、英語などの横書きの言語には不相当とも言える。さまざまな誤解を避けるため、ここでは苗字と個人の名前という言い方にする。

6) 日本語の母語話者が英語を話すときには、対人調節機能を担った名前の付加ができないことが多い。ゆえに、名前を付加することにポジティブ・ポライトネスを表す機能があることを知ってそれを意識的に利用することを言語教育の場で適切に扱うことには意義があると言える(Yui 2002参照)。

参考文献

- 庵功雄. 2001. 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク.
生田少子. 1997. 「ポライトネスの理論」『月刊言語』26巻6号. 66-71. 大修館書店.
神谷健一. 2002. 「会話における名前の付加 日英対照研究」『社会言語科学会 第10回研究大会 予稿集』77-82. 社会言語学会.
鈴木孝夫. 1973. 『ことばと文化』岩波書店.
鈴木孝夫. 1982. 「自称詞と対称詞の比較」國廣哲彌編. 『日英語比較講座 第5巻 文化と社会』17-60. 大修館書店.
田窪行則. 1997. 「日本語の人称表現」田窪行則編. 『視点と言語行動』13-44. くろしお出版.
水谷信子. 1985. 『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版.
山岸勝栄. 1995. 『日英言語文化論考』こびあん書房.
Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, and Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Edinburgh Gate: Pearson Education Ltd.
Brown, Penelope and Stephen Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
Brown, Roger W. and Albert Gilman. 1960. "The pronouns of power and solidarity." In Sebeok, Thomas A. (Ed.) *Style in Language*. 253-276. Cambridge: MIT Press.
Yui, Megumi. 2002. "When name-calling becomes something else: The function of addressing someone." 『駿河台大学論叢』第25号. 107-116.

資料

北川悦吏子. 2004. 『ロングバケーション 上巻』新風舎.

小林則子. 2001. 「00/12/22放送「イタズラ決定版！」より」, 「00/5/26放送「ジョーイ、絶好調！」より」, 「海外TVドラマの英語」

http://members.jcom.home.ne.jp/enjoy_english/tvdrama.html

nofumi. 2005. 「「愛」をめぐるって考えたこと」(2005/2/15付け)

<http://sea.ap.teacup.com/applet/carta/200502/archive>

Kimura, Lisa. 2002. "Friends script from 713: The one where Rosita dies." Teleplay by Brian Buckner and Sebastian Jones. Story by Sherry Bilsing and Ellen Plummer. Transcribed by Eric Aasen. *F.R.I.E.N.D.S on the Bridge*.

<http://www.la-tokyo.com/713-3.html>

Wachowski, Larry and Andy Wachowski. 1998. "The Matrix." *The Daily Script*.

http://www.dailyscript.com/scripts/the_matrix.pdf